

昭和二十四年七月二十三日
昭和四十年五月十五日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第一九二号）

慈

光

第十七卷

第五号

目次

| | | |
|--------------|------|------|
| 如来利他の大悲 | 近角常観 | (1) |
| 佐藤強三郎翁を悼む | 花田正夫 | (9) |
| 理想と現実 | 和才誠司 | (14) |
| 観無量寿経について(二) | 福島政雄 | (16) |
| 法信心抄 | | (24) |

如来利他の大悲

近角常観

一 真の罪惡観

信仰上注意すべきは、往々近頃の人は罪惡観ということを開連えている。罪惡観は、私は悪い者じやと思ふことではない。悪い者とは誰でもみな思っている。

しかるに其の悪い根性をみな知り抜きて、それをお見捨てなきお慈悲に腹ふくれると、今まで人を相手に色々苦しんだも、人が「あゝこう」と、五分々々の根性で、今まで人を当てにし要求した自分の方がすまぬとなる。又「あの人は斯くすべき筈なるに」など当てにならぬことを当てにし、苦しんで居た自分の方が申訳けなかつたとなる。又いよゝ／＼死ぬとなれば、親が子に別れにくく、恩愛断ち難いと思ふは人情上悪くはなけれども、人生より言えば、親が子を当てにしてゐるものである。

ところが、その当てにし苦しんで居るそこを哀れとお見捨てなきお慈悲なることを頂けば、今まで恩愛断ち難く、生死尽き難かつたは、この念仏三昧を頂かなかつたため、当てにす可からざるを当てにし、別れなくてはならぬを、別れともなく思つていたのである。

聖人は「竜樹菩薩和讃」の中に

恩愛はなはだたちがたく 生死はなはだつきがたし
念仏三昧行じてぞ 罪障を滅し解脫せし

即ちこの恩愛断ち難く、生死尽き難き心中をお察しありてそれが哀れとお慈悲に満足して、初めて死ぬる者は仕方なく死ぬると分り、斯る者をお見捨てなきお慈悲一つが有難い、となつた処が真の罪惡観である。で、いよゝ／＼頂く一念になると、私がこれ程人と張り合つて惱んで居ることや、又死ぬとなれば行く先の真暗な事や、また得た上はもつと喜びたいと思つても喜べぬ心までも皆よく御承知あつて、「その喜べぬのが無理でない、心淋しいのがもつともである。で我はそれが可哀想でならぬのである」とあるが如来利他の仰せなのであります。

XX 二 他利利他の深義

親鸞聖人は他利利他の深義という事をお示し下された。これが昔から分らぬことになつて居るのであるけれども、私はこれを今の味いに引き当てて喜ばせて貰いたいと思つ

事である。

御存知の如く、曇鸞大師の「論註」に、仏力を談ずる上より言う時は、他利でなく、利他でなくてはならぬといふ所謂他利利他の御教化がある。ところが何故、他利でなく利他であるかというに、他利は衆生より言う時の言葉にて即ち「私共が他なる仏に利せられる」が他利である。

又利他は、仏より言う時の言葉にて、即ち「他なる仏が私を利して下さる」が利他である。即ち私が親に哀れまれ恵まるとなる時は他利となり、親が私を愛し恵んで下さるとなる時は利他となる。

ところが何故他利では仏力が顕れぬかと言ふに「自分は心淋しいな、しかしこれを仏は知つて下さるのである」となる時は、即ち自分が他に利せらるる気持となり、他利となる。それでは自分より仏に向うもので、何時までやりても安心はつかぬのである。

ところがその私の心苦しき心中を知り抜きて、向うより「如何にもその心苦しいはもつともである」と言われた時には、即ち他なる仏が私を愛して下さるもので、利他である。これではなくては私共安心は得させて貰えぬのであります。

三 私の話に唯一つ異つた処

なお一つ言い度いは、皆様が私の話をききて安心して下

さる人が多い。すると中には近角が何か会得して言うから聞いている中に気がつくと思つるかも知れぬが、然うでない。私の話すに唯一つ違つたは、他無し。みんなが「こんなことではいかぬ、心淋しいようでは仕方が無い」と言うてる処を、

「いかぬじやない。心淋しいのがもつともである、悪のやまぬが無理ない、どうかして善くしたいであらう。人が不足に思えるももつともである。それだからその心を能く察し涙をもつて心配下さるお慈悲である」と、唯これだけである。

斯く言うとき、また、その思召はよく頂いていふと言われるから、今度は反対に言わんならぬ。

「それは頂いても居られようが、その安心は死ぬと思つて心淋しいところへ、無理にお慈悲を引張り込んで来て言つてゐるのじやないか。それでは矢張り人に對抗している如く、まだ仏にも對抗してゐるものである。むしろ死ぬとなると、昨日まで有難かつたのも、今日は有難くないのが本当だろうが、その有難くなれぬ、心淋しく仕方のない心中を初めより御承知ありて、それが可哀想で捨ておけぬとある広大のお慈悲である」と。

信仰の問題は、唯この一所ゆえ、みなさん御自身々々に心中を打ち出して聞いて下さるとよいのであるが、これよ

りすこしく私の方より皆さんの意中を推量して、話して見ようと思ふことである。

四 信仰上誰も抱く思い

先ず人生問題よりいかに

「成る程そういうお契れみでまします事は有難いが、それ位のことでは、私の苦しみは抜けぬ。私の五分々々が止まぬ、そこを哀れみ下さるは有難きも、唯それだけでは人の安心がつかぬ」

と。これが皆様の中に最も多かろうと思ふ。

「自分は人生の逆境に泣いているに、それを何程哀れと言つて頂いても、それだけじゃ何の力にもならぬ。現に自分は不具者で、人から軽蔑を受けて居る。然るにその不具が可哀想であるとの仰せであるが、全体人から不具々々と言われるさえ苦しく堪えられぬに、其不具が哀れとでは更に有難くない」

又、

「自分は修養して悪を直し度いと思つて居るのである。しかるにその悪が哀れとだけで、悪はちつとも直らぬのだから安心はつかぬ」

と、こういう方が多かろうと思ふ。又多いのは信仰問題で、「そのことはもう分つてる。其処さえ有難く頂ければもう、よいのであるけれども、其処一つが頂けぬで困つてるの

心に苦心した一人の老婆があつて、色々に話したけれども自分の方で頂く気で居るもの故、どうしても頂けぬ。

私も困つてしまつて、最後に、

「婆さん、お前のように駄目じや、到底頂けぬ」

と突き放してしまつたら、老婆はオロ／＼となつて涙ぐんでしまつた。そこで、

「婆さん、これからどうするか」

と聞きかえしたら

「もう地獄に行くより仕方がございませぬ」

と泣き出した。そこで、その時

「その地獄へ行く者を捨てぬと言つて下さるお慈悲でな

いか」

と一言話したら、にわかに関目が醒めた如く大層喜んで呉れた事があります。

かくまで尊きお慈悲であるに、これを御同よう頭から、一にもお助け、二にもお助けと、唯無雑作に言つて居て何うなるう。

又この間は、或人は北海道より手紙をよこされて言われるには、

「前には私の『親鸞聖人の信仰』を読み、如来廻向で深く喜んだのであるが、この頃は喜びが止つて、人に對しても冷淡な考を抱き、浅聞しき思いが起つて仕方がない。な

である。で其処を聞きたいと懸命に聞きに来てるに、その頂けぬのが哀れ／＼と言つて貰うだけではらちがつかぬ。然うきびしく言わずに、もつと頂けるように言つて呉れ」という心持の方が多数であらうと思ふ。現に昨日も、前一旦喜んだ方で、近頃喜びの止まつた方が来られて、お聖教の文句を示し「ここは何ういう意味、彼処は何ういう意味」ときかれる故、

「君そんなこと言わずにまあ聞き給え」と言うたら、泣かんばかりの態度で

「先生そんなこと言わずに、どうかここひとところを聞かせて下さい。これ一つが分つたら……」

と訴えられた。

「我々そのこれ一つが分る位なら仏の五劫永劫の御苦勞はいりませぬのである。又我々不具がイヤ／＼と言つて居るのであるけれども、不具者がお慈悲で完全にならうと力んでるのが根本の間違いで、仏より汝の不具が可哀相でと仰せられてあるに、不具がよくなれるなどあらせぬのであります」

五 全く品代りたるお慈悲

又皆さん折角求めてお出で下さるに、私がこちらから求めるのでは何程求めても頂けないというは余りひどいと思わるるかも知れぬが、私が先達で静岡に参つた時、年来信

おその上近頃は仏のお慈悲を一つ研究して見度いというよりの考が起り、又この信仰で一つ人生に真面目なる行動をしてみたいなどと思ふ」と。これでは全く私の本を逆さまに読まれたものである。

心だにまことの道にかないなば祈らずとも神や護らんとあるから、神に護られるために、誠にしようというのである。処が我々は何ほど力んだか、神が護りて下さる程の値打ちある行動や、又信仰、人格などには到底いたれない。絶望の死ぬより外に道無き者なのである。

然るに如来の慈悲はここで全く世間一応の教とは品代り「そのどうしても善く出来ぬ生れつきでの不具者で、誰ひとり善いと言わぬ、その汝の心中が、如何にも不慙で見離し置けぬ」とある遺る瀬のない御親切なのである。

六 仰せの厳しいだけお慈悲も深い

仏のお慈悲はかく言い渡しもひどいだけ、御親切も深いのであります。厳しく何うあるかと言ふに、

「汝等の信仰は、信心という薬を飲んで病気をよくならうという薬飲みの信仰である。信仰をえて苦しみを脱れ度いなどは、何をふざけた事いつてるのか。汝の病氣は五逆十悪という、総ての医者が匙投げた到底直らぬ病氣である」

と、斯う言い渡された時は、はやすぐその言葉の下から「あれはああ言うてあとで救いを言おうとするのである」と、先廻りをしてしまふ。現にかつてわざ／＼四国から法を求めて来て居ながら、これでどうしてもお慈悲の届かぬ方があった。その方はそれで幾日聞いても何うしても分らぬ。もういよ／＼しようがないとなった時、初めてかねていて見ようが無いと聞いて居たはこゝであつたかと、お喜び下されたのであつた。

故にかくお慈悲頂いて人格を高めようなどとは全くたわけた話で、我々は善きも悪しきも分らぬ人間なのである。敵を愛しようと言いつつ世間を敵に見てる人間なのである。一つも善き所とは無い。その代りそれ程悪しきを皆お見通しの上での、遣る瀬なきお呼び声である。この私の悪しき、そのどん底を御承知下さらなければ、私はわざ／＼大悲の苦勞はし給わぬ。

「我は皆汝のその悪しき所を知つて居る。それが如何にも苦しいだらう無理はない。故に救おうと言うのである」との仰せであります。

七 力なくして終る時

先達でもある御夫人が頻死の病床で言われるには、
「私は念仏が生まれぬ。人はもう斯うなつたら念仏が出来るものだと云つてくれますけれども……」

とのお慈悲なれば、そのやる瀬のなき御心配にはからわれまいらせて「名残り惜しく思えども娑婆の縁つきで、力無くしておわる時、彼の土へは参るべきなり」自分はもうこれで往生一定と、自分で力んできめる一定で無いのである

又
いそぎまいりたきこころのなきものを、ことにあわれみたまうなり。

今その方が危篤となつて体弱り力無くなり、口が乾きて念仏称えたくても称えられぬ。するとあたりからは、「念仏が出ぬようでは本当であるまい、往生は間違ひなく頂けて居るか」の話ばかりである。「間違ひないか」と胸に手を置くから有難い思召の程が分らぬ。「その分らぬ仕て見ようの無い、其処が親の方では殊に哀れでしょうがないのだ」とのお慈悲であると話したら、聞くなり涙を流して喜び下された事である。

八 それはそれとして置いて

お慈悲の事は皆これであります。昨年の雑誌（求道第八号）に書いた清水君にしても、私の話をきかれたこと五年間である。五年前より毎月お宅に話に行き、皆様が開かれる中にも、君はいつも熱心に求められた。又この学舎にも常に聞きに来られたけれども、何うしても頂けぬ。遂に頂けぬ／＼て草疲れてしまい「自分は何うしても頂けぬ」と

と。こは周囲のみんなが、念仏は出るか／＼と言うもの故、かえつてお慈悲が頻死の身を責める責め道具になつて居るのである。「自分じやとて喜ばせて貰うて居るなるも病苦のために口が乾き、称えたくも称えられぬ」との言いわけが先になつて居るのである。で言われるには、

「先生、何やら力なくしてという事があつたように思いますが、そこを一つ聞かして下さい」

と。そこで私は早速「歎異鈔」を読みあげしかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられて、いよ／＼頼もしくおほゆるなり。また浄土へいそぎまいりたきこころのなくて、いささか所勞のこともあれば死なんずるやらんと心細くおほゆることも煩惱の所為なり。久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、未だうまれざる安養の浄土はこいしからずそうろうこと、まことによく／＼煩惱の興盛にそうろうにこそ。なごりおしく思えども娑婆の縁つきで力なくしておわるときかの土へはまいるべきなり。

危篤となつて病苦つれば、もう喜ほうと思つても喜べぬ唯行く先が真暗なばかり。その煩惱興盛の仕て見よう無きを仏かねて知ろし召して、その者が可哀相で捨てられぬ諦めてしまわれたのである。その中に段々病氣が重り危険に迫つても、今度は一向聞こうとしない。御親父が言われるには、

「自分の家は先祖代々他力の教を喜んで来たのである。然るに若し今お前を、仏壇の前から地獄にやるよう事があつては先祖に対し、わしが申訳が立たぬ。どうか聞いてくれ」

と言われた一言に驚いて、私が行きお話することとなつた。すると君は病床で身をもたげ先ず言わるるには

「私はかく近來病氣が重つて甚だ堪えにくい。併しますそれはそれとして措いて、父がかく／＼」

と、今の御親父の言葉を言い出された。そこで早速私はその言葉尻をつかまえて

「それはそれとしておいてじやない。あなたは今かく病氣重り、死が眼前に見えて来ると、心淋しく苦しいのじやないか。あなたはその心淋しき方はそれはそれと片つけて置いて、一方にお慈悲という薬が頂けると、その苦しい方がらくにならうと、お慈悲を苦しい方と別々に頂こうとして居られる故頂けぬのである。今あなたは死ぬと思つて心淋しく苦しくてならぬ、そのあなたの悩みを察し、その苦しさにお慈悲も喜べぬ、その煩惱具足の者を捨てぬと言つて下さるのでないか。かねて聞いている仏のお慈悲は今あ

あなたが斯く行き詰つて居るそこを前から知ろし召し、然うなる汝故それがいよ／＼可哀相とある大慈大悲である」と話したら、言下にあの如くお喜びなされたのである。

九 仏かねて知ろしめして

又先日の若い御夫人にしてもそうである。この方は幾ら聞いても私の話が分らぬ余り、殆んど私と鬪たたかう勢いでお聞き下されたのであるが、私が

「あなたの苦しみは更に無理と思わぬ。如何にも人が敵と思えるであろう、そうであろう」

という、その一々の言葉がその方の胸に当り、其場は、らくになつてお喜び下されたのであるが、併しここが妙なものでも、私がかく言う私の話を聞いて下さる中はらくであるも、それがまだ真にお慈悲が分つたのでない。この間も或人が求道学舎に行くときがらくになると言われた。らくになるのはかく私が皆さんの心の苦しき点をお察しして話すを、私がかく言うてくれるものと聞き下さるから一時的だけは心がらくになる。けれど一歩外に出れば、私と離れるから忽ち駄目になつてしまふのである。

ところがかく私なるものが察してお話して居るのではない。察したところが初めから無力の私である。皆さんの胸にお慈悲を届けることもようせぬ私なれば、私の話を聞いてらくになつたは駄目である。

その方は黙つてじつと考へて居られる。これは大抵私の本は一度読んで信仰に入る方は滅多にない。大抵人から勧められて一度読み、本棚にほうり込んで置く。それをあとから気がついて再びさがし出し、今度は本当に読んで下さるという、殆んどきまりになつてあるのである。で私は重ねて「あなた何処に置いたかもう入れ所も分らぬ様になつて居るのだから。それよかこれを持つて行つて早くお読みなさい」とお勧めした。

すると今まで分らぬ／＼と言つてた人がその一言で、……而もこれを側で聞いて居られた方が「まあそれ程までに」と言われた一言で、これまで長々苦しんで居られたその人が

「今までこれ程までに私の身のため言つて下さるに、気がつかないのであるか。『懺悔録』も『歎異鈔』も何処へやつたか行き場が分らぬ迄にしてしまつておいて、今日心の遣り場が無くなり、ついふら／＼とここに來させて頂くと、私とその本の遣り場の分らぬまでにおくことまで知り抜いて、然ういう私が捨てられぬとお慈悲をましますか」と、忽ち様子が變つて、初めて大安心をして下された事であります。

で斯く皆さん、皆さんが信仰問題で頂けぬと苦しんで居られることも、人生問題で思ふようにならぬと歎いて居ら

ところが私の申すのは、かく皆さんの、その苦しいところが如何にも辛いだろうと、そこを察し知り抜いて下されてのお慈悲である。私の察して言う如く、その如く親様が察して下さるのであるとのことを申すのである。

で今の御夫人も、矢張りここが分らぬ。そして仰言るには「先生のお話はよく分りますけれど、何うしても仏様が分りませぬ」と、ここで話が行き詰つて話が進まぬようになつてしまつた。処が不思議なもので、其日の談話会に、或る御夫人が、私の『懺悔録』を読み、「三世了達の仏が何で私の心を知らずに御座ろう、知つてその私を捨てぬとお慈悲である」と氣付かせて貰い喜んだとの告白があった。で、この事を申し、

「あなたの苦しい悪いその心を知り抜き、そのよくなれぬとこがいよ／＼可哀相とある、こんな御親切が何処にあるるか」

と話して居る中に、話のはずみで「私も一度『懺悔録』を読まして貰いましょう」という事になり、それではとその本をお渡した。すると「その本なら宅にもありますよ」と言われた。私も「もう四五年もお聞き下さるのだから、必ずあるはず」と申して又もとに戻し、話を続け、いよいよ立ちしなに「折角故まあ持つて行きなさい」と又再び渡した。

れることも、又生死問題で死ぬと思ふと心淋しく行き詰つて居られることも、大悲の仏は了々に透き通る程にお見通し下され、その人生の闇に悩むが如何にも可哀相との切なる御同情より、我々のこの浅聞しきを何処々々々でも捨てて下さらぬが仏の智慧海である。而してその智慧海の有様は「如来の智慧海は深広にして涯底なし、二乗じじょうの測るところに非ず。唯仏のみ独り明に了したまえり」とありて、仏の境界に行かぬことには我々には分らぬが、よくも／＼かくまで悪しき私を、悪しければ呆れられ捨てらる世の中に、かくまでに汝が悪いから、それ故可哀相で捨てられぬとは、実に仏智の不思議、誓願の不思議、名号の御不思議である。斯くして私の業報に縛られ一寸も思ふよう出来ぬ有様を、遂一私の知らぬ先に皆知ろし召し下され「一寸も一分も思ふようにならぬだろう、それが哀れて長の苦勞した」とあるが、如来利他の仰せなのである。

親鸞聖人の真宗の味いは、唯この一つに極まる事でありませぬ。南無阿弥陀仏々々々

大正三年二月、求道、第十一卷、第一号所載。

佐藤強三郎氏を悼む

花田正夫

四月十三日夜、滋賀県の発願寺様の御老母、園輝子刀自の訃報をうけました。次いで十四日、新潟市の佐藤強三郎様の急逝を大阪の大字様からお知らせ頂きました。

園様は那須野一乗師と共に近角先生のお導きを一筋によろこんで居られました。常観先生がお亡くなりになり、一乗師もまた常音先生も往かれましたからは、御一統の皆様の間法を唯一のおよろこびとされて、それ一つに打ちこんでいられました。三月二日にも慈光会を催されて私もご招待を頂きましたのに、桜花と共に八十七歳の天寿を完うされてついに散華されました。

白道の彼方につづく花の雲

佐藤様は近角先生に親炙された方で慈光誌に度々御寄稿下さいましたので、御存じの方も多いことでありました。数年前軽い中風の発作があり静養なさつて大体回復され、先年の新潟の大地震の時も無事に過ごされましたのに、春陽を迎えました日、再発作で遂に亡くなられました。

それが出来る位ならどよりも楽なのですが、どもりと思われたくない、そのために余計にどもるのが病源なのです。こんな調子でありますから、たとえ大学は卒業出来ても電話一つも稼にかけられないようでは就職は絶望なんです。まず一番にどもりの矯正院に根気よく通いました。そこではどもりの人ばかりですから気が楽になり、その上発声法の練習を続けて居りますと段々とどもらなくなりまして、さてそこを出て、何かの拍子でどもり始めるともう駄目です。今迄練習したことが皆崩れてもとの黙阿弥に帰るのです。

何度か失敗をくり返して、もうその方面の希望を失いかけてました頃、ある高い山へ一人で登りました。そこには人はもとより猫の子一匹も居りませんでした。そこで思いきり声を出してひとり語りをしました。すると不思議なことにチツトもどもらないのです。

私そこでハッと気付きましたことは、誰も聞いていないところではどもらないのだから、結局、人が聞いていようが居まいが、それを気にしなくなればどもりからも解放される、ということでした。

今まではどもりをなおす技術ばかりを学んで失敗を重ねましたが、今度は人に笑われても心の動揺しない人間になる外はないと分りました。

先月は原稿を数回分すでに頂いて、近く発表させて頂く心組みで居りましたのにお名残り惜しいことであります。

ここに佐藤様が御来庵下さった時、直接聞かせて頂きました御自身の体験談を掲げさせて頂き、よきお導きを仰ぎたいと思います。

×××××

×××××

私が大正の初めに慶応大学に居りました頃、一番苦しんだのはどもりのことであります。今でも一向になおっておりませんが、このどもりを何とかしてなおしたいとあらゆる苦心をいたしました。

今では電話もダイヤルで自動的に呼び出せますが、当時は「モシモシ何番」と交換手に呼び出して貰わねばなりませんのにそれがどもつて出来ないのです。又駅に行きましても切符を買うのに駅名が仲々言えないので大汗をかきました。友達には「そんなことわけないではないか、駅名を紙に書いて出せばよい……」と申しますが、駅名を書いて出すには自分が啞かどもりという看板を掲げると同様なのです。

さてそれから一番に進みましたが、「心頭滅却すれば火も亦涼し」と教えられる禅の修行でありました。あちらこちらと禅堂をたずねて修養にはげみましたが、この道は技術の習得以上に難しいことでした。遂に禅以外にキリスト教であれ、日蓮宗であれ、有名なときくと何かと指導をうけました。内村鑑三氏の講話もききました。

然しこれも亦賽の河原の石積みで、同じことを繰り返すばかりでありました。そしてもう人生に絶望して居りました。人生不可解と言つて垂敵の滝に投身した藤村操のあとを追う積りで、或日下宿を出かかると、親友の一人がやつて来て「君何処へ行く」と聞くので「一寸散歩に」と答えると「僕も今日は暇だからいっしょに行こう」と云つて何処までもついて来るので自殺する機会も失いました。後に近角先生にこのことを打明けますと、「それは君が極度に悲観しているのだから親友が心配してそれとなく護つてくれたのだよ」と教えられて、成程そうだったなあ！と知らされました。

とも角も、親友に日夜に護られないと生きて行けない状態になって居りましたが、そうした時、大正五年の或朝、何気なしに新聞を読みますと、そこに求道会館の落成と近角先生の御苦勞されたことが出て居りました。ことに先生は会館の寄附を人に仲々言われないで法話だけして帰られ

るというようなことが多く、基金が集るのに年月もかかられた由も逸話として書いてありました。それを一読して、この世の中に、こんな立派な僧侶の方も居られるのか、よしこの方にお話を聞こうと心に定めました。

会館におたずねして、どもり／＼ながらようやくお願いすると、手帳をひろげられて、「何日の何時に会館に来なさい」と許可を頂きました。

当日、早速お伺いして、今迄の苦心談を皆洗いざらいに申上げると、先生は一つ一つを満腔の御同情をもつて聞きとつて下さり、「よう来なされた。たとえどもりがなならないで、誰も相手にしてくれなくても、阿弥陀仏は何処々々までもお呆れない、お見捨てはないのだから、これからよく聞きなさい云々」と慰めて下さいました。

私は胸にある一切を先生にスツカリ打明けられたので、心が非常にやすらかになり、同時にこの者をお見捨てないお慈悲のありと聞きますにつけ、心もひろく、千万人の味方を得たような心強さを覚えました。

すると不思議にもあまりどもらなくなりました。笑うなら笑えというような広い心になりましたためでしょう。思ひもかけぬ喜びでありました。

私は一週間程は心も空の生活をして居りましたが、フットしたことからまたどもりが始まりました。そうなるとうど

仏法を聞くとは、仏陀の思召しをきき、それを頂く一つでありますのに、自分の思惑を中心にして、仏のおたすけをその上に蒙ろうとする横着な対度を知らされました。

私は只今でも矢張りどもりはやみません。唯青年時代と老人期とは多少の趣きにはありますが、チツトモよくなったと申せません。然し以前は、どもるにつけては、こんなことではいかぬ／＼と心を責めて居りましたのが、今は、このどもりがやまぬ者をお呆れなくお見捨てのない大慈大悲の親様を知らされ、やまぬにつけては南無阿弥陀仏と、願力を仰がして頂いて居ります。

頭を廻らして昔を偲びますと、廿四歳の秋、常観先生の御教化を蒙りましたが、本年（昭和二十八年）は教え年六十二歳、卅七、八年間、両先生のなみ／＼ならぬ御導きを頂いて参りました。

最初、聞き始めました頃は、和讃の

尽十方の無碍光は無明の闇を破りつつ

一念慶喜するひとを必ず滅度にいたらしむを繰り返し、また太子憲法の二条

四生の終帰、万国の極宗なり、何の世・何の人かこの法を貴ばざらん、人はなはだ悪しきものすくなし、能く教う

んなにして見ても咒文を忘れた魔法使同様に如何ともするすべもありません。困り果てた拳句に、再び近角先生のもとに走りました。そしてその願末を申し上げると、今度は今までお優しかつた先生と打つて変り、大きな声で、

「どもりがなおると誰が言つた！」

と大叱されると共に、矢継ぎ早やに懇々と聞きそこないの御注意をうけました。これで、もう見離されるのかとスツカリ悄気きつてうなだれて居りますと、

「これからは日曜講話に聞きに来たまえ」

と云われたので、ホット一息して帰りました。

然し今にして思いますに、この時の痛烈なお叱りこそ私には非常に有難いことでした。このお叱りによりまして私の聞法の出発点を正して頂いたのであります。私はそれまでの聞き方は、どもりが苦にならぬようになりたい、そしてどもりをなおしたいという一念でした。そこで先生をお尋ねして、一時どもりがよくなるかと有頂天になって喜びましたが、それが怪しくなると失望落胆しましたのは、一喜一憂みな自分のどもりを治したいという欲望の成否にかかつて居りました。こうした聞き方は自分の煩惱、欲望満足のために仏法を聞いていたのであります。仏法を利用して自分の欲望を達成しようとしていたのであります。そこを近角先生からきびしく叱られたのであります。

るをもて従いぬ。それ三宝に歸りたてまつらずば、何を以てか枉れるを直うせん。

コレダ、コレダ。あゝ自分も大変なものにぶつつかつてしまったものだと言う感じです。

能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃

初めて聞くが、ホントにうがった言葉だ。

信心よろこぶそのひとを如来とひとしと説きたまう

大信心は仏性なり、仏性すなわち如来なり

ダンダン凡夫が如来様になって来るような気がしてくる。

仏言広大勝解者、是人名分陀利華

貧乏人が千億万長者になつて、人間中希有の偉人の列に加わるような気がして来ました。

然し、どもりは依然としてどもりであり、凡夫は矢張り凡夫でありますのに、信心という鉄棒を持つて、鬼の首でも捕つたように得意になり、人々をナギ倒して、人々にウラマレて来たわけです。

如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし

アア、そうだ。私もやりましよう、となりまして、人の言葉も容れず、身の程も忘れて、一路邁進、突喚、進軍……

人から見たら危く見ていられなかつたでしょう……

ツイにドカンとぶつかりました。

何時の間にか、自分は求道会館、近角宗のためにやりま
すとリキンでいたのです。腹の底は自分の名譽のために！

これが六七年の後でありました。

かく行詰ると、先生のお話は分つているが一向に喜べな
くなり、昔の元氣が生まれません。そこで、俺の信心はあやし
いものだ、となりました。

人に会うのもいやになり、先生にお目にかかるのも恥し
く、さればといつて、他に行く所もありません。他へ行け
ばみんなが呆れてしまうからです。

どうしても、求道会館の常観先生の所で、五分五分離れ
た、金剛心のお話をきいて、再び往生のよろこびを再現し
なくてはなりません。

この時、常観先生が、真宗のためといつて苦しまれた御
心境の片鱗と、常音先生が、また間違つたと、トツオイッ
なさつたとの御告白の片鱗とを、両方同時に味わせて貰う
たことでありました。

何時の間にか懐中に億万円の宝をもち、神通力にもおと
らぬ信力を自分が貯めているという考えになっていたので
した。貧乏人が金持になつていたので。凡夫が如来にひ

理想と現実

幾山河 安く越えける 八十の坂

此処ぞスタート いでや励まん

私は今年八十歳の新年を迎えたから、年賀状にこんな狂
氣じみた腰折を書き添えたところ、友人から

「えらい元氣だね」

と冷笑された。まさにその通り、口は達者だが、実
体は老衰しきつた頭迷固陋のかたまり。現実は今晩もあて
にならぬ、枯草に宿る露の身だが、生きて居る限り望みを
捨つることの出来ぬ厄介者だ。理想と現実との板挟み、そ
の交叉点に立つ私、喜ばんとしても喜べない私、悪いと知
りつつも止められない私、後悔しつつも改まらない私、あ
きらめんとしてもあきらめ得ぬ私、この如何ともして見よ
うなき私を、私の欠点悩みを承知、いな、この欠点悩みあ
るが故に、どこ／＼までも見捨て賜わぬ親心、み仏のお慈
悲に氣付かして貰つて見れば、喜ばずには居られぬ。世の
中、いな私の心は矛盾と撞着ばかりであるが、念仏の世界
はこれらをすべて肯定せられるから、ありがたい。

生死即涅槃も、煩惱即菩提も、理想と現実との相違も、

としくて、生きながら仏になつていたのでした。

跡戻り／＼して辿るらん 甲斐なきことに心感いて
ホントに自分も偉い信者になつたという名利心の雲霧のた
めに、仏日を覆うて苦しんだわけでありませう。

死を思うたものが……それを思いとどまり、学校を継
続し、社会人となつて、村長を十二年、会社重役十二年、
続けて来ました。

此間、大小、軽重、いく度も、跡戻り／＼しながら今日
にいたりました。

私は出生数日、幾度か危篤状態をつづけましたので、
祖母が「丈夫に育つようによい意味の名をつけて下
さい」と注文し、それで父が、強三郎と私の名をつけ
ました。

名号と何かわるらん我名こそ親の給いし慈悲の呼び声
名聞の罪を重ねて旅するわれに撰取不捨と宣うか仏は

死に様はよし如何あらむとも凡夫われ唯御仏の誓にまか
せて。

佐藤 強三郎

和才誠司

日常生活の悩みも、悉くが、なるほど、そうか／＼と、一
一これを肯定し、玩味し、感謝し、そこにお慈悲を深く味
わせて貰う、

『念仏者は無碍の一道なり』
のお言葉が、実にありがたい。

私の悩みは悪しき場合に起るだけでなく、善き場合、嬉
しき時にも着いてくる。困つたものだ。先日こんなことが
あった。嘗て私が軍隊に勤めていた時、今から五十余年前
私の従卒をしていた、宮崎県椎葉の山奥の戦友から

「私もすでに七十歳を越え、寒さが身にしむようになり
ました。あなたの御健康を案じます」

と、丁重な見舞状と、山で捕えた狐の毛皮を贈つて来た。
永い間御無沙汰している戦友から、突然厚意のこもつた手
紙と贈り物を貰つて嬉しかつた。

この厚意を永く記念し、感謝するため、加工することに
したが、生憎当地に加工業者がなくて困つたが、いろ／＼
手をつくし、人様のお知恵を借り、漸く東京で加工して貰
つた。また老妻は

わけであります。業という言葉はこれは自分の事に使う言葉でありまして、他人の事に使う言葉でないということを知りて居ります。何という業の深い自分だろうと、こういうのは正しいのでありますけれど、お前は業の深い奴だとかういふことを言うのは非常に惨酷なことがあると聞かされて居りますが、そういうことでありましよう。それだから業と縁といふことはよく使われる言葉でありますけれども、そういう使い分けがあるのであります。縁といふのは明るい心持をあらわします。ところが仏陀は、無縁の大慈悲。何々の縁があったからこれを救うというのじやない、けれども私の方から云えば、こういう御縁で仏の心が私にひらけたと、こうなります。私の方からは無縁の慈悲であります。私の方からは、私が青年時代に貧乏な苦しみをして居りました時に近角先生の御法話を聞くという御縁が、あって、そういう御縁で心がひらけ始めましたとこうなり、向う様仏様から無縁の慈悲であるところなるのであります。そういう縁があったから自分とはどけてやるといふのでなくて縁があつても無くても何処までも自分の心をとどけたといふのがこの仏の御慈悲である。そこところが仏の大慈悲といふのと衆生の立場と大分ちがうところがあります。私の方からは御縁があつて、仏の方からは無縁の大慈悲が私にとどいて下さつたのであつて、私の方からはこういう

表面から見ますといふと、それこそ迷信におち易いようなことが一杯あるのであります。観音様を念ずるといふと、処刑場で自分が首を切られようとする時でもかえつて向うの刀が折れて了うといふようなところは有名なところでありまして、それで日蓮聖人の瀧口の御難といふものが丁度それにあたるとよく云われるのであります。その外、観音様を念ずると非常によい男の子が生れる、非常によい女の子が生れるといふことがあります。また海上を船で行く時に大風において観音様を念じると忽ちに大風がおさまるといふようなことを一杯ならべてありますからして、それだからどうも観音経を読んで迷信におち入り易いのであります。これは法華経の講義などをこの頃あらためて読んで見ますといふと、あの中に大風だなんだといふてあるのは、吾々のこの煩惱の風のことである、観音を念ずれば吾々の煩惱の風がおさまるといふようなことを仰言るのである。それから私共は、実は今の皇太子殿下がやがてお生れになろうとする時に、法隆寺で夏何人か集つて佐伯定胤殿下のお講義を聞いていたのであります。その夏、もうやがて皇太子殿下がお生れになろうといふ時に、私共は佐伯定胤殿下のお導きでこの法華経の普門品の、観世音を念ずると男なら非常に完全な方、女なら非常に姿のよい子が生れるといふところを三度ばかり繰り返して、あの太子殿で誦誦した

御縁があつてといふ、こういうところであらうと思ひます。このあたりが非常に明るのであります。

観音の信仰

その次には、この阿弥陀仏の御姿の次には、観世音菩薩それから勢至菩薩のお姿を相当ねいりに述べられてあります。この観音さまといふことには私なんかも感じが深いのであります。高楠順次郎先生という方が、もう亡くなされた方でありまして、非常に働きのある方で、大正蔵経を出して、一百巻もありません非常なものをお出しになつて居りますし、これを手八丁、口八丁という非常な働きのある方でありましたが、この高楠先生が私に、東洋で一番広くひろまつているのは観音の信仰である、とこういふことを仰言つたことがあります。私は、そうでございますかとその言葉を今日でも思い起すのであります。

普門品のこと

観音様は仏様の御慈悲の現れである。そして観音様を最も詳しく述べてあります。↓法華経二十五の普門品ふもんぼんといふのが観音経であります。観音様のことを実に詳しくお述べになつて居るのであります。私は最近普門品のことを少し書かせて頂いたのでありますが、あの普門品のことを

ことがあります。それは私共が、今度お生れになるお方が皇太子としてお生れになるお方は本当に福德智慧のお方でありましようといふ私共の願ひでありましたのであります。それはそれでいいと思つてあります。それからいいますと、女の方が妊娠になりました、そして今から幾月かの後に子が生れるといふ時に、身を謹しみ心をつつしんでおいでになる。そして観音の教を念じておいでになれば、いわゆるそれが胎教といふ意味で胎内の子供さんにひびいて立派な子供さんが生れるといふ、そういうことは信ぜられると思つてあります。

普門品の眞意義

けれども観音経をただ表面から見て、この観音様を信ずれば大金持になれるとか、どういふ災難でものがれるとか、そう解釈するのは大分迷信の解釈だと思ひますのであります。みんなあの中に大風とか大浪とか書いてあるのは私共の煩惱の大風であり大浪であるといふように解釈してあります。成程さうである、そうなつてくるとこの観音経といふものは非常に有難いものであるといふことになりまして、観音様の三十三身おんげん応現といふことをその中に説かれてあります。観音様は種々な姿になつて我々の前に現れて下さる、これはこういうことでもあります。

菩薩の意味

このお経を読みますという、大無量寿経などもそうでありますが、お経の初めの方に沢山の菩薩がそこにおいてなるというように書いてあります。大無量寿経では菩薩の数が少ないのでありますけれども、華嚴経というものは読みますという、実にその何頁にもなりますように東の方からはこれ／＼の菩薩が集つて、西の方からはこれ／＼これ／＼の菩薩、沢山の菩薩が集つておいてになるということになっておりますが、さあそういう菩薩というものはどういふものであろうと思つておりましたが、私が広島に居りました時に、矢張り二十年ばかりお育てをうけました臼杵祖山先生というお方からうかがつたのであります。お経の中に沢山の菩薩の名前が現れているがそれはどういふことであるかという、それは何も色々な菩薩が歴史上の人物というのじゃない、それは仏様のいのち、真実のいのちが私共に色々な姿でもつてそのいのちのまことを注いで下さる。そのまことの注がれ方が実に百万色々の姿になっている、それを菩薩は現しておられると、その話を承りましてから成程と思ひまして、それから考えるのであります。観音様の三十三身応現というのは、たとえば私共が会う初めてのお方であるけれども、その人によつて、ある仏様のお慈悲というよなものを受けることがあります。

観世音の意味

前によく申しましたが、私の娘のことですけれども、二十六で死にましたところの私の娘は矢つ張りそういう意味で観音の化身という意味を私に与えますので、その外の色々な方々について、その瞬間いろ／＼なことを感じる、その人が観音様じゃないのでありますけれども、その人が御縁になつて観音のお慈悲というものがひらめきとて感じられると、そういうのが観音様の三十三身応現ということになります。今では私そういう風に思いますのであります。

そうなつて参りますというあの観音経というものが非

常に有難いものになつてくるのであります。今ここでは観音菩薩の色々のお姿を述べてありますが、その観音菩薩のお働きというものは今のように観音経に非常に詳しく現されてあります。そして非常に面白いといつてはどうでありませうか、観音様であります、音を観て下さる。色を見て下さる顔色を見て下さる姿を見て下さるというのはいく分るのであります。音を観て下さる。これは考えさせられます。観音様というの、音を観る、つまり私共の声なら声を観て下さる、声を耳で聞いて下さるのでなく観て下さるというの、どういふ意味でありますか。これは私、考えさせられたのであります。それは私共が物理学で置きましたように、光の速度は音の速度より非常にはやいのであります。そうすると、観音様というの、私共を御覧になつて、私が何か苦しいことを言葉にあらわそうとして、いる時に、その言葉があらわれない前にその顔付など見て、あ、これはこういうことを訴えようとしているな、ということをお覧になる方であるということになる。つまり世の中のいろ／＼様々な苦しみを声に出さない前に観音様はチャンと観て下さる、そういう意味で観世音と申し上げるのじゃないかと、それが一つの私の考えであります。それから観音様は、施無畏者、決して物事を畏れない心を与えて下さるお方である。こういう風に云われてある。

智慧の大勢至

それから次に大勢至菩薩のことをいつてあります。これは智慧と力であります。一体この仏様の働きは一方では慈悲であり、一方では智慧であると云われますが、私は長い間、その智慧ということが分らなかつたのであります。段々分つて参りまして、自分のこの何ともいえない浅ましい姿を照らし通して下さる、それが仏の智慧である。自分はいくらでもいい積りでいる、それをお前はいい積りでいるかも知れないが、お前の姿はこの通りであるぞということをおの智慧の力で照らして下さると、ハア自分じや気がつか

なかつたが、自分はそういう奴であつたということが始めて分る、そういう意味で勢至菩薩は仏の智慧の現れである。こういうことを私なら私の身に受け入れるのであります。

丈六の仏像

まあそういうことであります。この中には、そんなに大無辺の仏像というものは、そう直ぐ分るものじゃない。矢つ張り一丈六尺とか、もつと小さい仏像をあがめて仏様

の広大無辺な智慧なり慈悲なりを頂きたよりにして行くところ
こういうことになっております。

それはその通りでありまして、清沢先生でありましたか
仏のお名号を拝んでも、仏像を拝んでも、それをもつて広
大無辺の仏の御真実を自分に頂く感じがある、ということ
を云つていられます。それは我々の力が、仏像もお名号も
何もなしに直接に広大無辺の仏の力を観ずるというのであ
れば上々であるけれども、仲々そういかぬものであるから
お名号、或は御絵像或はこの御仏像というものを眼の前に
おいて、そういうものを拝むのは、その仏像、その御絵
像、そのお名号によつて広大無辺な仏のいのちを感じるた
よりにするのである。それはその通りなのでありまして、
いくらお経に広大無辺な阿弥陀仏の姿を細かに述べてあり
まして、それですぐに私がそれを感じるというわけにい
かぬのであります。

仏像は象徴

そんな意味でありましてキリスト教の方から云えば、仏
教は偶像崇拜だというようなことをいう人もありますし
けれど、それは考え方が足らぬのでありまして、私共が偶
像を拝むのは、その偶像をたよりにして広大無辺なる仏の
いのちを我身に感ずるのでありまして、偶像を拝むとい
うのが決してこの低級なことではないということになります
し、そんなことを云うなればキリスト教の人は何故十字架

いものである。不善業を造り五逆十悪、諸々の不善を具
せん、とありますから、よくない業を造る、業であります
から闇いのであります。五逆十悪、父母に歯向こうとか、
仏様から血を出すというようなことであります。十悪とは
殺生、偷盜ちゆうとうというような十の悪いこと、それをずうと並べ
て見ますというと、矢張り私自身が、五逆十悪に当るので
あります。あたると云い度くないところが一方にあります
けれども、せんじつめますと五逆十悪ということになり
ます。

私が若い時に大分親孝行した積りでありますけれども、
最後は親不孝のドン底というところへ行つています。じゃか
ら時にいいことをやつたというのが、結局うそになる。そ
うなりますと結局は五逆十悪というところになる。
落ちたくないけれど落ちてくる。そして所謂悪道におちい
る。地獄・餓鬼・畜生というのは他人事でなくして所謂貪
瞋痴しんちと、むさぼりいかりぐちという世界に落ちいつて苦し
みまた苦しむ、何時までも苦しんでいる。そういう人
はいよ／＼死ぬという時に苦に迫られて念仏するという暇
はない。そうすると、いい友達が、その念ずることが出来
ないならば無量寿仏の御名を称えるがよろしいと勧めて、
十声ばかり南無阿弥陀仏を称えさせる。そこで始めて仏の
浄土に生れるとなっておりますが、実はその私共がここに

のキリストを大切にするのか、矢張り十字架のキリストと
いうものをたよりにして神の愛をそこに感ずるのじやあり
ませんかと、こうまあ私共の方から云いたいところであり
ます。兎に角、何と申しますか象徴と申しますか、そうい
うものが私共にとつては大事な意味を持つのでありまして
仏像なり御絵像は広大無辺なる仏のお慈悲なりお智慧なり
を感じる象徴になるのでありますわけでありまして。それで
すから決して偶像崇拜、偶像を拝んでいるということがそ
んな低級なつまらぬことじやないわけでありまして。

九品往生と私

そのあと、上品じやうほんじやうしやう上生から下品げほんげしやう下生まで九品に分けて、こ
の世で善い行い、善い心をもつて、善い働きする人から何
も出来ないで悪いことばかりした下品下生までのことを次
から次にすべて説かれてありますが、それを私次から次
に読んで参りますと、上品上生も私には駄目である
上品中生も駄目、上品下生も出来ない、段々上品の上生も
駄目である。一々そこに書き並べてありますことを見ます
というと、いろ／＼修行も出来ない。こういう戒をまもる
ことも出来ないというようになるかと申しますと、
それでは結局どういうことになるかと申しますと、
下品下生になるのであります。下品下生といえば仕様のな

落ちてくる。ここに落ちてくるということは今迄すこしは
いいことをやつて来たと思うのが皆うそになって来ます。
私も青年時代にはひとかど立派なことをやつてる積りでや
つて来ました。けれども今日になって振り返つて見ますと
あの時あの人にこんないい積りでやつたことが嘘になつた
親に対して親孝行していたのが実は親不孝なのであつた、
この人に対してこんなことを言つたのは大嘘になつてい
るというようなことを自分の過去を考えて見るといつとすつ
かり駄目であるということはこの老年になつて参りますと
いうところ感じますのであります。今迄はいい積りでやつ
て来た、それが皆嘘になつて来ている。そうなりますとい
うと、下品下生ということになるのであります。一体こ
の観無量寿経は機のことと云いますか、大無量寿経が法とい
うものを中心にして説かれていたと申しますと、この
観無量寿経は機のことを説いてあります。こういう仕様の
ない、機というのは私共の心のはずみであります、こんな
に仕様のない心のはずみを持つているもの、その者を目指
してのお慈悲である。ところが私なら私が、この七十余年
のことを色々静かな時に考えて見ますと、今申
しました通りにあの人に真実を尽した積りであつたのに嘘
になつた、この時あんなことを言つたのは真似目に云つた
積りであるけれどもこれも嘘になつたということが一杯思

いおこされるのであります。それだから矢つ張り九品往生といううちでは矢張り下品下生というようなどころに行くのであります。

そんな奴じやない積りじやという心が一方では動いて来る、自分だって何かすこし取りどころはありそうなものじやということは一方向じや起つて来ますけれども結局は下品下生ということになる。これが七十何年この人生の歩みを続けて来ましたところの最後の私の姿になるのであります。それは私が何も自分を謙遜するためにそんなことを云うのじやないのであります。静かに自分の過去を考えて見ますという結局いい積りでやつたことが皆嘘になっている。こういうことなのであります。

そういうことを私以外に知っているのは私の家内だけかも知れません。私の家内は私に「貴方は立派なことを言っているけれども皆嘘ですよ」とむきつけに云うのであります。「こんなことを慈光に書いてあるでしょう、あれも嘘ではありませんか」とやつつけられる。成程私の悪いところを皆知っているのは、この世の人間では私の家内、四十九年ほど見て居りますから隠しようがない、何でも裏から見ても居りますから、こんなところへ出て、こんな話をしていっているという、如何にも立派そうに見えるかも知れませんが、けれども、裏から私の家内が見ますと「あんなことを言つ

の私が自分の心持の上、自分の今迄の人生の歩みの上からああも思います、こうも思いますということを一通り申し上げただけであります、これが決して本当の観無量寿経の解釈にはならないと思いますが、多少の御参考にはな

法 信 抄

養 老 院 だ よ り

三 瓶 徳 英

………愚生昨年十月当養老院に入れて頂き半年の歳月を過ぎました。只今五十三人の老爺媪と三十歳位の精薄も三人居りますが、三棟十四室、八畳の間に爺四人媪四人つづ住んで居ります。

自由と平等の文化時代に、仕事は自由、やつてもやらんでもよく、定められた起床七時、部屋と縁の掃除の外は別に用事はありませんが、門外に出ることと酒は厳禁です。外出外泊も事情あれば許されます。平等は三度の食事と隔日位のおやつを頂くことです。時々地方の婦人会などが慰問下され、歌い踊り、お土産や菓子など頂き感謝して居ります。

養老院生活は健康であれば自分の自由時間が充分ですか

ていますが皆嘘ではありませんか」と、家内が見ても嘘でありますから仏から御覧になると、たしかにこの下品下生であります。

そうまでじやないと思う、未練が何処かにありますけれども結局ここに落着く、そこに所謂機の眞実、私の心のはずみというものは結局はここになるというようなことであります。

機 の 眞 実

まあそういうことで大事なことが終るのであります、観無量寿経というのは結局は機の眞実というところを教え下ざるところの大事のお経であるということを思いますし、これを繰り返して、このお経を頂いて見たいと思っております。

実際このお経には、善導大師の非常に熱烈な御註釈をなされたところの観経義疏といいますが、定善義とか散善義とかに分けて、そして親鸞聖人が教行信証に引用してあるような、実際この私共の駄目な姿を非常に詳細にお註釈になつて、世界の註釈本のうちで、善導大師のあの観経義疏ほど熱のこもつた註釈は無いと云われているようであります、そんなものを私は直接には拝読して居りません。そうでありますから、私の今晚申し上げましたことは、ほん

と思ひますのであります。どうぞそのお積りでお受取り頂きたいのであります。では今日はこれまでに終らせていただきます。

昭和三十九年十二月四日夜。

ら読書など出来ません。昨春から浄土願生偈を和らげて書いて見る考で四五月かかつて五七調のように一応いたしまして或勸学の和上さんに、なれば直して頂きたい、本文を傷けると思召せば焼捨てて下さいと手紙をつけて差出ししましたところ、何分天親菩薩の深い大哲学思想は容易に伺われないとの返信をうけて最早一年以上になりますので落第と覚悟して居ります。あの様な大徳の書かれたものは解つても解らなくてもそのまま拝読すべきだと思ひます。

こちらの院長は禅宗の坊さんで死者の葬式等に來られて時々お話があります。入院者は真宗門徒が多いが念仏は食事の時寮母さんが灯明、焼香、打鑑されると処々称名の声がきこえます。何分養老院は死と三度の食事を待つばかりの処です。時々同室同志で仏さんの話をします、或者は此世が地獄極楽だ、此院は極楽の辺地だなど申します。

私も時々往生浄土について色々考えることがあります。

浅原才市翁が

「南無は私で阿弥陀はあなた。私とあなたで南無阿弥陀仏機法一体。これで死なずに参るお浄土」

と言われましたが、南無阿弥陀仏は仏種、これが私の中へはいつて居つて下さる。臨終直に法身仏となり、報応化身自由自在の境界に往くから、七宝樹林も八功德水も、宮殿樓閣も、只今私の脳裏に彫りつけられた美景絶景も何時でも浮び出る事が願生偈の三種莊嚴、廿九種の清浄土で、六十年も前に別れた両親にも兄弟朋友師長等俱会一処が樂しみの一つのように思うこともあります。

宗祖聖人は七十、八十というお年で御慈悲を書き伝えて下さいました。凡愚の私は只々、時々胸の中で念仏するより外はすることも書くことも出来ません。お粗末千万他人の前へは出られぬ奴が私であります。大経五悪段の、常懷吝心、常懷邪惡、常懷憍慢の私で、当然如何なる人にも嫌われ憎まれる私で御座います、人間世界では師も友もありませんが、近角先生からお聞かせ頂いた、眞実の友眞実の恩師はただ、仏ましますばかりで御座います。懺愧の外はありません……この私が可哀相だ、サゾツラカロウ、サゾ残念ダロウ、サゾ淋シカロウとみて下さるお慈悲と聞かせて頂いたことを思い出させて頂きます。ソラ事タワ事に日夜を過ごし、何れ遠からぬ内には両親に会えることを思い時々夢を見ることがあります。

私は押入れのカバンにお名号をまつり朝夕無言の読経をして居り三部経の切り読みをします。このお名号は亡き母しい、どうしよう。この私の心の底を知つてくれる人が欲しかつて泣いた。

「ツノ」から離れたい、「ツノ」と別れたい、その心、それが「ツノ」であるものを、何しに別れられるものか。浅間しや、愚者である。この愚者の、この私を、
「その汝、その汝を我は哀れでござる。誰が何と云うとも、我はそのお前が可愛うござる。ふびんにござる」とつてはなれて下さらぬ大御心にはぐくまれ、南無阿弥陀仏々々々。「ツノ」をあずかつて下さらなかつた近角先生ありがとうございます。

昭和四十年 二月十日。

合掌、まいどわかりにくい事をお聞き頂いてすみませんこととでございます。夢の話のうちで一つ忘れておりましたのでついでにお聞き下さいませ。

「ツノ」と別れたい、「ツノ」から離れたい、その心、それが「ツノ」であるものを、何しに離れられるものか、浅間し、愚かしく、愚者であると、どこかの底の底に落ちてゆくような気持の時

「こはいかに、仇と思ひし人はみな、わたしがためにはボサツさま」

とひとり言を云いながらハツキリ目が醒めました。「こは

の死の直前手をとつて書いて貰うたもので、この七十年間シヤツのポケットに入れて今日まで持ち続けて来ました。凡愚人仏の種を貰うべし、これがなければ迷苦はつきじ往生の種は南無阿弥陀仏なり、私一人にやるとのたまう四月十八日、大田市川合養老院内 徳 英

× × × × × × ×

「ツノ」の話 笹 井 ナ ミ

今から十九年前の一月に見た夢のことを誌します。近角先生は十六年十二月に亡くなられましたので、先生没後五年のことでした、その夢に、
近角先生に、この業の「ツノ」をおあずけしたかつて、お願いしたが

「それはあずかれませぬ」
と仰言つて、あずかつて下さらなかつた。その時「ツノ」が云うのには

「あなたとわたしとなんで別れられるのですか。メツソツなこと仰言いますな！」

と云うて、ついて帰つて来た。その「ツノ」は生々として今ここに居てくれる。この「ツノ」と別れたかつた、避難したかつたが、別れられぬというてついて帰つて来て、悲

いかに、と云いながら汗を一ぱいかいておりました。泣きながら「こはいかに」とばかり言うて居りました。

そのあと、その時の気持は、今よう書きませんが、ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ。

皆人の尼の心はすてよかし女牛の角はさもあらばあれこれも御開山様のお歌なり。ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ。

これが昭和二十一年一月三日でありました。二月に高松の求道会で酒見先生にこの話を聞いて頂かねばならぬような御縁がむすばれたのであります。私は震いながら話をいたしました。勿体ないこととございます、ナムアマミダブツナムアマミダブツ。

夢の世に夢とも知らず夢を見て夢から夢に移る夢の世ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ。

昭和四十年 二月十二日、再 信





あとがき

あなたふと青葉若葉の日のひかり
芭蕉翁

芭蕉の句の心に浮ぶ五月晴れとなりまし
た。五月には日本の各地で親鸞聖人の降誕
会が催され、聖人の御生誕を喜びたたえる
声が続所におこつて居ります。何時も思ふ
ことではありますが、我々には死後にその忌
日をまつるのが世の常でありますのに、釈
尊やキリスト、そして親鸞聖人はその誕生
日を祝うという不思議さであります。そこ
に世の常の感情をこえた、死によつて消す
ことの出来ないまことのいのち久遠の導き
を蒙る者達には何の矛盾も何の不思議も感
じないで降誕を祝うのであります。

われなくも法はつきまじ和歌の浦の青
草人のあらんかぎりは、八御書より
「如来利他の大悲」の近角先生の御講話
は、大悲の底をつかれての御導きでありま
す。先生ならではお聞き出来ない実語、何
度も読むことに驚かされますことでありま
す。

「理想と現実」の和才誠司様の八十歳の御

慈光第十七卷 第四号 昭和四十年
昭和二十四年七月二十

五月十五日 発行 (毎月一四十五日発行)
三日 第三種郵便物認可

僧味、無碍の光明下の御あゆみ、有難く頂
きました。安波敷八様が、死の前にされて
「南無阿弥陀仏とはなるほどそうか」と意
訳出来る、大肯定の境を告げられました
が、「至徳の風静にして、衆禍の波転ず
る」大信海の法味を教えられます。

親経の福島先生の今回の御講話に、「下
品下生(極愚最下の凡夫)の仲間によつば
り自分はおちてくる」とあります一句、源
信僧都、法然上人のことを「われらが分な
り」と生涯お味い下さつたのとのおずと規
を一にし、導きことと頂きます。

佐藤強三郎翁の追悼のころから、かね
て承り心の底に深くのこりましたことを誌
させて頂き、有縁の方々へおとどけ申し上
げます。生きていられる間はまた今度々々
とずるずるべつたりになり勝であります
が、もう二度とお顔もお声もお会い出来な
いとなつて、その別れの涙の中に亡き人の
心がしみこみ始めるものであります。思え
ば一句の法文を身にしみて頂けるのも、こ
うした無数の捨身の御苦勞のたまものであ
ります。

白道のかなたに続く 花の雲

御案内

○毎月第一、二、三日曜日午後一時半、

※ 一道会例会。

市電新郊通一丁目下車、東へ一丁半。

○毎月廿四日午前午後、昭和区小松町、

※ 教西寺法話会。

市電御器所通り下車、桜花学園東側。

○六月七日午後二時、尾西市三条板倉、

※ 蓮光寺修道会。歎異抄六章講話。

一宮よりバス尾西三条下車。

○六月十二日午後二時、奈良市上三条町、

※ 浄教寺青年会。

× × ×

定価 半年 二百円(送共)
一年 四百円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番